



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ルドルフ・ビチャニッチにおける「農民の国家」の思想 : ユーゴスラヴィア人民主義の一考察
Author(s)	越村, 勲; Koshimura, Isao
Citation	スラヴ研究, 33, 17-44
Issue Date	1986
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5155">https://hdl.handle.net/2115/5155</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113257.pdf



# ルドルフ・ビチャニッチにおける 「農民の国家」の思想

——ユーゴスラヴィア人民主義の一考察——

越 村 勲

## 目 次

- 序
- 一、ナロードと知識人～「経済同盟」の運動とその特徴
- 二、R・ビチャニッチの思想と第二次世界大戦～「農民の国家」から農労同盟へ
  - 1. 1940年のビチャニッチと「農民の国家」の構想
  - 2. ビチャニッチと「自信を持った」農民～「農民主義」から「新人民主義」へ
- 三、結びにかえて～ビチャニッチの思想とユーゴ史の底流

## 序

近代の社会思想史上に、ルソーをはじめとする人民崇拜や人民自治の思想の流れを読みとるとすれば、ルドルフ・ビチャニッチ（1905-1968）もまたこの流れに属したといえよう。思想史上のこの大きな潮流は、人民主義（populism）の流れとなって東欧の農民運動を巻きこんだのであった。

東欧における人民主義的な運動全体の展開については、ギツァ・ヨネスクの理解が、問題を提起するものとして、挑戦的である。彼は、それをロシア人民主義（ナロードニチュストヴォ）の流れと活発な農民運動に根ざした東欧特有の思想傾向との相克の歴史として説明する。そして前者を人民主義、後者を農民主義（peasantism）と呼び分ける\*。

\*この区別によれば人民主義は、第一に古い共同体を重視し、資本主義をとびこえ直接社会主義の共同体にこれを発展させようとする。第二に人民主義は、知識人の指導なしに人民の宿願はかなえられないと考える。第三にそれは、旧国家の破砕によってのみ新しい社会が現われうる、と主張する。他方、農民主義は第一に個人農を社会の範とし、彼らの労働や財産所有そして行政に対する考えをもとに社会と国家を形成すべしと考える。第二にそれは、社会経済上の基本原理を被抑圧民族解放の問題と結びつける。第三に、農民は数の上で優勢であるだけでなく精神的・民族的価値の故に政治社会の

指導を担う階級になりうる、と信じた<sup>1)</sup>。

この区分に依ってヨネスクは、19世紀末から20世紀初めまでの時期を人民主義の影響を強く受けながら、他方農民の重視や民族問題への取組みなどに農民主義の要素もみられたとき、とする。しかし第一次大戦を契機として土地改革と普通選挙が行なわれ、農民政党が台頭すると、東欧の運動は第二の段階に入る。農民政党は専ら農民の利益を代弁し、農民のための権力を確立しようとする階級政党となった。ヨネスクは、それを特定の階級の政党となることを好まない人民主義の傾向からの乖離であると考え。しかし第三の時期にはこのような農民政党の運動も崩壊する。議会主義を背景に活動していた農民政党の権威は、国王など独裁者の登場や大恐怖の波及とともに失墜した。ヨネスクは、政党政治の下で農民の意見が必ずしも反映されなかったこと、また農民の経済的組織化も進まなかったことを重視する。人民主義は、苦境に陥った東欧社会の近代化にとって農民主義よりも有効であった。それが人民勢力の動員により大きく寄与するものであったからである。ヨネスクは、第四の段階に人民主義が新人民主義 (neo populism) として復活したとみない。そして労働者と農民の同盟を人民と呼ぶか、民族共同体そのものを人民と呼ぶかによって、新人民主義はあるいは共産主義にまたあるいはファシズムに傾いたのである、と彼は分析する<sup>2)</sup>。

ギツァ・ヨネスクの主張、とくに東欧では「農民主義」が不可避免的に「新人民主義」へ発展していったという問題提起は、今後もひきつがれるべきであろう。しかし「新人民主義」の時代とされる1920年代から30年代の運動については、必ずしも従来研究されてきたとはいえないように思われる<sup>\*\*</sup>。そしてとりわけユーゴスラヴィア(以下ユーゴと略称)の検討が、その重要性に比して遅れを見せているように筆者には思われる。ユーゴでは戦前だけでなく第二次大戦中から戦後の人民運動においても農民が重要な役割を果たしてきたのである。(ユーゴの農民たちは大戦中の抵抗運動にも積極的に参加した。さらに戦後この国の社会主義が形成される過程で農民たちが与えたインパクトは注目に値するであろう。その好例は、社会主義化のなかで行なわれた集団化政策が自営農民たちの抵抗にあい、1953年転換せざるを得なかったことに示される。そして現在でもこの国の農業において自作農の比率は高い。)ユーゴでは戦間期の農民運動は「新人民主義」につながり、社会主義の方向性についても影響を与えたのではなからうか。この点ヨネスクも、世界的に見た場合ユーゴは第二次大戦後人民主義的色彩を帯びた新しい革命解釈を行った国の一つである、と述べている<sup>3)</sup>。そこで筆者は、ヨネスクの問題提起すなわち「農民主義」から「新人民主義」への発展の問題を、まずユーゴについて検討することとしたい。

<sup>\*\*</sup>1920年代から30年代の東欧の人民主義的な運動については、ハンガリーの農村を探訪した知識人たちの例が知られている。20年代中頃から農村に足を踏み入れたこの知識人たちは、農村をハンガ

1) Cf. Ghița Ionescu & Ernest Gellner ed., *Populism: Its Meaning and National Characteristics*, London, 1969, pp. 98-99.

2) Cf. Ibid., pp. 99-109.

3) Cf. Ibid., p. 119.

リー民族と社会の基盤とみなそうとした。この運動は大恐慌の波及とともに発展期を迎えた。資本主義の弊害から農村を守り農民を民族のまもり手とすること、また民族的伝統を軽視する共産主義とも異なる「第三の道」が、彼ら共通のプログラムとなった。ユーゴの農民運動とほぼ同じく1935年～38年頂点に達したこの運動も、内部に精神的・文化的運動にとどまるべきか政治運動に拡大すべきか、都市労働者と連帯すべきか否かについて対立があった。そして反都市主義が反ユダヤ主義と結びついた者も多かった。こうして38年以後分裂を余儀なくされ、組織化の試みは失敗に終わった。しかし第二次大戦終了直後行なわれた選挙で農民政党が勝利したことは、彼らの活動が必ずしも徒勞に終わった訳ではないことの証しであった<sup>4)</sup>。

さてこのような関心からユーゴ農民運動の特質を検討しようとするとき、本稿の主題R・ビチャニッチは、その一つの手がかりを与えてくる。彼は戦間期から第二次大戦をへて戦後に至るまで、この国の農民さらに人民解放の問題に取り組みかつ発言をつづけた、ユーゴ民衆運動の重要な証言者である。戦間期のユーゴではクロアチア農民党\*\*\*が最も活発な農民運動を展開したが、ビチャニッチは1930年代後半以降この党の理論的指導者として活躍した。そして第二次大戦中ロンドンに移り、ユーゴ亡命政府の高官としてクロアチア人民の利益を代表しようとしてつとめた。しかしその後彼は、国内の抵抗運動に同調するようになり、これと協力するため亡命政府と袂を分かたつ。さらに第二次大戦後のビチャニッチは、ザグレブ大学において経済学の講義を担当し、ユーゴの社会主義経済政策に対し学窓から活発な提言をつづけた<sup>5)</sup>。

\*\*\*この党は1904年アントゥン（1868～1919）とステパン（1871～1928）のラディッチ兄弟らによって創設された。第一次大戦後この党は共和主義と民族自決にもとづく連邦主義を基本理念とした。そして1927年までの四回の国会議員選挙（1920年、23年、25年、27年）のあいだ、21年弾圧された共産党を除きまた短期間に一度連立政府の与党となったことを除けば、戦間期ユーゴ最大の野党であった。セルビアでは急進党が最大与党の地位を永らく保持し、さらに国内「民主派」の連合体である民主党が頻繁に急進党と連立内閣を形成した。そしてこの三者に、スロヴェニアのキリスト教政党であるスロヴェニア人民党と、ボスニアを中心とするイスラム教徒富裕層の政党ユーゴスラヴィア・イスラム教徒組織が急進党の中央集権主義への反発と接近を繰り返した。以上ユーゴ主要諸政党のなかにあつてクロアチア農民党は、S・ラディッチの死と前後して、民主党から離脱した独立民主党と連合し、クロアチア全体を代表する政党となった。

このようなR・ビチャニッチの思想と生涯については、総じて戦間期ユーゴ農民運動の研究が遅れている中で、ユーゴ国内でもほとんど研究はない。しかし、彼がクロアチア農民党の左派に属したという評価は定着しているようである。この党の右派や中間派は、ナチス・ドイツへ追従するか、少なくともその圧力に抵抗しようとする努力を示さなかった。そしてクロアチアの民族的利害を越えて、ひろく東欧の被抑圧民族解放の問題を追求

- 4) 以上については、佐藤紀子「戦間期ハンガリーにおける人民運動の一考察—1930年代における知識人・民族・民主主義—」『スラヴ研究』第24号所収、及び南塚信吾「ハンガリーの農村探索者たち」栗原彬ほか編『社会と社会学（1）～世界社会学をめざして』新評論1983年所収、参照のこと。
- 5) ビチャニッチの生涯とその思想については、拙稿「ルドルフ・ビチャニッチの思想～その人民主義と連邦主義との関係」『一橋論叢』第93巻6号所収、参照のこと。

しようとする姿勢に欠けた。一方ビチャニッチは、ユーゴ国内そして他の東欧諸民族との連邦化によってナチスの圧力に対抗すべし、という構想を唱えた。国内の社会変革については、たしかにクロアチア農民党全体の改良主義的傾向に従い、農民のための国家は平和的漸進的方法によって勝ち取られると唱えた。しかし彼の変革の構図はあくまで農民の参加を前提とした。そして彼は、大恐慌以後疲弊した農村に注目した人民主義的知識人のなかでも、とくに農民生活の実状にもとづいて社会変革を図ろうとした人物であった。

ビチャニッチの具体的な人民主義的活動は、ハンガリーの先達にやや遅れ、1936年の農村調査から始まった。そしてクロアチア農民党傘下の協同組合「経済同盟」の機関紙編集長としてその理論的指導を担った。この「経済同盟」の運動は、恐慌からの防衛と同時にヨネスクのいう「近代化」への一つの模策である。さらに1940年の「農民の国家」に関する講演は、まさにビチャニッチが「農民主義」から「新人民主義」へ向おうとする様子を窺わせる。そしてその思想は第二次大戦によって、一つの変化をとげ、戦後の社会主義化を生き抜いた。

以上から本稿においては、まず恐慌以後の人民の状態を、そして「経済同盟」の運動を通してこの人民とビチャニッチら知識人との関係を検討する。次に、「農民の国家」の講演を中心に、ビチャニッチ思想の内容またそのおかれていた状況を検討し、さらにそれが第二次大戦中どのように変化するかについて考察する。そして最後に、戦後のその展開とあわせて、ビチャニッチ思想全体のもつ意味について考えてみたい。

研究史の浅いテーマについての拙ない試みではあるが、多くの方々の御批判・御指摘を頂ければ幸いである。

## 一、ナロードと知識人—「経済同盟」の運動とその特徴—

ここに一枚の写真がある。農民たちの微笑の輪の中、筋骨逞しい青年が一人驢馬に跨っている。1936年31才のビチャニッチの姿である。彼は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ西部やダルマチア山岳地帯などの後進地域を農村探訪の対象に選んだ。セルビアなど北部の農民は前世紀に、ユーゴ南部の農民も第一次大戦後の土地改革により、封建制から脱けだし自作農となった。しかしその経営規模はごく限られていた<sup>1)</sup>。一方急速な資本主義化を図る政府は、農業の近代化よりも工業化を優先させた。(1930年代前半 県単位の農業関係支出は、県予算の10%。政府の同支出は、国家予算のわずか0.87%にすぎなかった<sup>2)</sup>。) ビチャニッチが訪ねた後進地域は、小規模な農民経営と政府の工業優先策との間の矛盾が、恐慌後最も顕著に現われた地域であった。

ここでユーゴ政府の経済政策を概観しておこう<sup>3)</sup>。1918年以降の土地改革は、ロシア革

1) ユーゴ全農家数の約7割弱は、5 ha 以下の土地を耕作する小農及び零細農であった。その土地も、農地面積全体の28%を占めるに過ぎなかった。この点については、Cf. Jozo Tomasevich, *Peasants, Politics, and Economic Change in Yugoslavia*, Stanford, 1955.

2) Cf. D. Mitrany, *Marx against the Peasant*, London, 1952, p. 260. D. ミトラニイ著の場他訳『マルクスと農民』農林省総合研究所1956年, p. 217.

3) 両大戦間期ユーゴの経済政策の概略については、Cf. J. Tomasevich, *ibid.*, 及び Cf. I. T. Be-

命に触発され外国人不在地主の土地を占拠した、農民たちの革命的気運に対処するものであった。しかしこの改革は当初、没収されるべき大土地所有の規模についても、賠償の額や支払い方法についても明確に規定していなかった。没収の規模（例えばビチャニッチが訪ねた地域で言えばおよそ40 haの耕地）が定められたのは1931年のことである。またこの没収規定もいくつか例外措置が設けられた。農業について結果的には、大土地所有を政府は優遇した。こうして戦間期のユーゴでは、地域により多少事情は異なるが、教会領や公有地など少数の大土地所有が残された。

この改革は、一時的には、新たに自作農となった中小農民の労働意欲をかきたてた。しかし、戦間期全体を通してみれば、資本の欠如—外債も戦時債務の決済にまわされその他の資本も大半が工業化にあてられた—や農村の過剰人口に制約され、農業における生産性の向上はほとんど見られなかった。工業化のテンポも、農村の過剰人口を吸収するにはあまりに緩やかであった。そして1920年代から30年代にかけて押寄せた世界恐慌の波はこれらの経済状態を崩壊させる。1928年の時点と比較して34年の穀物価格は56%も下落し<sup>4)</sup>、工業製品の価格との間に格差が生じた。加えて農業負債が蔓延した。36年政府は、農民負債に対し支払い猶予の措置をとった。しかし農民たちは、自分たちの村の商人に対する負債は免除されたが、逼迫した必要から他村の商人に貸付けを求めたのであった。

さてビチャニッチが訪ね歩いた地方の民衆は、前年の長い旱魃により凄惨な窮乏状態にあった。家畜は既に売り払われ、農民たちの衣服は最早修繕に耐えられなかった。子供たちは裸と素足のままにされた。仕事の口などどこにもない。人々は云う。1935年はあの暗い1917年よりもっとひどい年だった、と。しかし旱魃が悲惨の主要な原因ではなかった。土地不足と商人への負債そして農産物と工業製品の鉄状格差こそが、窮乏のもととなる最も根の深い害悪であった。

ビチャニッチのえらんだ農村では、ハンガリーに近い穀倉地域ヴォイヴォディナに比べると、耕地100 haあたりの人口は5倍半余りに上った<sup>5)</sup>。この地域の人々もすでにザドウルガ（大家族共同体）を脱け出し、世帯人員の増加とともに土地が分割された。さらに、不合理な分割による地片の散在が農民たちを苦しめた。地片の間を移動して歩くのに一時間かかるのが普通であり、数時間を要する場合もあった<sup>6)</sup>。

つぎに、農民の負債は様々の必要から生じた。クロアチアの比較的豊かな地域でも衣料品と税の支払いに多くの現金を必要とした。当時は繊維製品の多くが輸入に頼っており<sup>7)</sup>政府の保護貿易策が加わって、衣料品の購入は深刻な経済問題であった（衣服自給を奨励した「経済同盟」は、協同して機織機を使用する運動を後進地域で広めた）。次に税の支払いについては、恐慌以後も消費税が農民たちに重くのしかかった。そして道路税、市場への入場税は農民たちにとって致命的であった。ある市場の前で、農婦が一人泣いていた。

rend and G. Ranki, *Economic Development in the 19th and 20th Centuries*, Columbia, 1977. 同南塚信吾監訳『東欧経済史』, 中央大学出版部, 1978。

4) Cf. M. Mirković, *Ekonomska historija Jugoslavije*, Zagreb, 1968. str. 318.

5) Cf. R. Bičanić, *Kako živi narod*, 1936, Zagreb., str. 22.

6) Cf. *Ibid.*, str. 23.

7) Cf. *Ibid.*, str. 49.

わずかの卵を売りに立寄った彼女は、入場税が1ディナールするのに仰天した。卵6個でようやく1ディナールになるのであった<sup>8)</sup>。こうしてクロアチアの穀倉地帯スラヴォニアの人々も、「家には食料でも何でもある。ないのは金だけだ」とつぶやいた<sup>9)</sup>。しかしビチャニッチが訪ねた貧しい地域では、人々は現金がなければ食料を手にもすることもできなかった。この地域の農民は、決して生産の改善のために負債を背負ったのではなかった。農業は依然「原始的」で、木製の犁も多く使われていた<sup>10)</sup>。土地なし層や零細農の間では、わずかの作物が税支払いなどの負債にあてられ、それがこうじると多くの家族の飢えを凌ぐため負債を負うようになった。金貸し商人は品物を値踏みしたあと、金額を記載したラウエで農民に貸し付けた。しかし農民たちが現物で負債を返却しようとする、商人は返済分の見積り金額だけを書き、どれだけの量の品物を返却したか記載しなかった<sup>11)</sup>。収奪もまた「原始的」であった。時に商人は、銀行を利用することもあった。農民が負債を返却できないとき、商人が保証人となって銀行から借り受けるのである。期限がくるたび農民は、商人のもとへ助けを請いにきた。利子は増える一方であった。直接銀行に貸付けを求めることは困難であった。近代的金融網が未だ発達していなかった当時、銀行の貸付け利子も25-40%に及んだ<sup>12)</sup>。農民はぼやいた。「土地改革で地主から自由になったけれど、今はもっとひどい商人や銀行の奴らの言うなりになってしまった」<sup>13)</sup>、と。

農産物価格の低下は、大恐慌のあと深刻になった。第一次大戦前ダルマチアでは100リットルのぶどう酒で1着の背広を得ることができたと言うが、今は3倍のぶどう酒が必要なのである<sup>14)</sup>。恐慌によって農民の生活水準は大幅に低下した。運よく鉱山や製材所、建設工事やセメント工場などで働くことができたとしても、彼らは熟練労働者の半分ほどの賃金で最も苛酷な肉体労働に耐えねばならなかった。その中から彼らは故郷へ支送りをしなければならなかった。家族が飢死しないために<sup>15)</sup>。

以上がビチャニッチ自らの目でたしかめた最も貧しい地域の人々の生活であった。従来クロアチア農民党の運動において、農民は格差のない同質の階層であるとみられる傾向が強かった。しかしビチャニッチは、土地所有における階層分化を認めた。ただし彼によると、ドイツなど先進工業国に比べればこの分化は必ずしも大きなものではない。そして比較的豊かな農民も土地を分割しており、彼らの富裕化はさほどすすんではない。一方下層農民の窮乏化は深刻である。このように現状を分析したのちビニチャニッチは、中農を範として下層農民の状態を中農のそれに近づけること、富農が一層富裕化することを防ぐことを目標とした。その目標のため彼は、農民たちの協同によって階層分化を防ごうと考えた。そして農民協同の形態として、古い地縁や血縁による結合ではなく、より広い農民

8) Cf. Ibid., str. 66.

9) Cf. Ibid., str. 70.

10) Cf. Ibid., str. 24.

11) Cf. Ibid., str. 80.

12) Cf. Ibid., str. 82.

13) Cf. Ibid., str. 19.

14) Cf. Ibid., str. 40-41.

15) Cf. Ibid., str. 114-116.

階層の連帯を彼は訴えたのであった<sup>16)</sup>。

実際農民たちは、苦境の中で互いに手を取り始めていた。役畜や農具を協同で使用することを思いついた。穀物種子を管理し、春蒔く分の小麦やとうもろこしも持たない農民たちにこれを貸し出す協同組合が創設された。この組合では、10-25%余分に種子を返すことになった。商人支配の下での現物利子は、100%以上になる筈であった<sup>17)</sup>。農民たちはこうして、商人の独占的経済支配に立向い始めた。彼らは、経済的のみならず政治的、文化的に「旦那衆」から自由を奪い返すため、相互の結合を強めなければならない、とビチャニッチは主張する。しかしそれは、農民相互の直接的な結合でなければならない。いかなる善意からしても、農民たちの組織を彼ら自身の手で築かせようとせず、何かの指導を施そうとすることは誤りである。人民的インテリゲンツィアの義務は、農民層の直接的相互関係の発展を助けることである。これがビチャニッチ農村探訪の結論である<sup>18)</sup>。

ビチャニッチが人民の力に依拠しえた背景には、自ら土地改革など「農民革命」をもたらした東欧農民の旺盛な活力があった。彼らにとって都市支配層は外国文化の担い手にすぎず、農民こそが民族を象徴する文化様式の担い手であった<sup>19)</sup>。こうして、ヨネスクのいうように、農民の力は民族主義の目標に結集された。都市と農村の対立は、一方、従来の都市支配層に代わり農民たちが政治を決定すべしという要求を生み出した<sup>20)</sup>。戦間期東欧の農民運動を支えたのは、こうした目標や要求であった。しかしクロアチアの場合、さらに別の要因が農民運動を活発なものにした。統一ユーゴにはクロアチアとセルビアという、勢力の拮抗する二大民族勢力が存在した。そしてバルカンのリーダーを自認するセルビアが中央集権制を導入したとき、他民族に政治的主権を脅かされたクロアチアの農民たちは、民族主義のうえに反中央集権主義の傾向を加えた。またこの対立は、政治的な問題に必ずしも限定されなかった。例えば1938年ビチャニッチは、クロアチアの税負担は国内の他地域に比べ重くかつ還元もされておらず、クロアチアではオーストリア・ハンガリー帝制下よりも事態は悪化している、と述べた<sup>21)</sup>。民族主義と結合した反中央集権主義の闘争は、経済的闘争でもあった。

ビチャニッチは、このような要求を背景とし、とくに恐慌後組織されたクロアチア農民大衆の活力と自発性をあくまで尊重すべきである、と主張した。また彼のこの主張には、ジョルジュ・ソレルの思想が色こく影をおとしている\*。1936年5月14日付のクロアチア農民党機関紙にビチャニッチは、「経済同盟」の性格づけと方向性に関する一文を寄せた。「『経済同盟』は、人民に対して上から押しつけられたものではない」<sup>22)</sup>、と彼は強調する。

16) ビチャニッチの階層分化論とその解決策については、Cf. R. Bičanić, Rukopis o diferencijaciji seljaka, 年代は不詳であるが1940年前後と推察される。但し、ビチャニッチの手稿・書簡類は現在 Arhiv Hrvatske (クロアチア資料館) に Ostavština Rudolfa Bičanića として保管されている。しかし内容及至年代上の分類などは施されていない。

17) Cf. R. Bičanić, *Kako živi narod*, opet. cit., str. 20.

18) Cf. Ibid., str. 118-119.

19) Cf. Ivo Šarinić, *Ideologija hrvatskog seljačkog pokreta*, Zagreb, 1935, str. 107.

20) Cf. Ibid., str. 59.

21) Cf. R. Bičanić, *Ekonomska podloga hrvatskog pitanja*, Zagreb, 1938, str. 138, 147, 207-209.

22) R. Bičanić, "Rad Gospodarske Sloge", u *Hrvatskom Dnevniku*, 24 svibnja 1936, God. I, br. 1, str. 33.

それは何らかの啓発啓蒙によって作りあげられたものではなく、人民の間に存在していた理念が組織的形態を得てできたに過ぎなかった<sup>23)</sup>。組織の運営も、自ら畑を耕やす農民の手によって行われねばならなかった。そこで当初、役員の中に商人や聖職者、退役憲兵が混じっていたことが批判され、農民が役員となることの必要が徹底された<sup>24)</sup>。そしてクロアチア大半の村や町がこの役員会の網の目に覆われるようになったのである。

\*農民運動に加わる以前ビチャニッチは、「深遠でかつ洗練された知識人」<sup>25)</sup> ソレルが人民の情念を重視したことに共感を抱いている。この点筆者には二重の意味で興味深い。その一つは、本稿の序に触れた「新人民主義」は、ロシアのナロードニキだけでなく西欧の人民主義的思想家の影響もまた受けていたと考えられるからである。かつてパリに留学したビチャニッチの場合もその一例であろう。次に、ヨネスクのいうように「新人民主義」が共産主義とファシズムに分裂したとすれば、ソレルが民族共同体に幻想を抱かなくなったことを重視する<sup>26)</sup> ビチャニッチは、フランス思想の援けをかりてファシズムから一線を画すことができたと考えられるのである。

「経済同盟」の資金は、一口10ディナールの出資金で賄われた。41年まで毎年ほぼ一人一口の割合であった。資金上必ずしも豊かでなかったため、「経済同盟」は農民たちの間の橋渡し役にとどまることも多かった。穀倉地帯の小麦と海岸地帯のぶどう酒の交換<sup>27)</sup>はその好例といえよう。

資金ではなく農民の結束が力となった。その第一の例は肉牛市場での闘争である。肉牛の最低価格を取り決める運動のなかで「経済同盟」は肉商人と衝突した。農民が現金を得るため家畜を手放す場合、それまでは不当に買いたたかれることが多かった。この取り決めが行なわれた直後、市場での肉商人との争いから、ボサヴィナ地方の一農夫が死亡した。葬儀には2万人の人々が参列したという<sup>28)</sup>。つぎに「経済同盟」は、農産物の下落にも拘らず市場入場税が引き上げられたことに抗議した。ある地方都市では市場への食糧品出荷を拒否する農民たちのストライキの結果、これらの税が行政当局によって引下げられた<sup>29)</sup>。さらに、農民たちが臨時農業労働者として働く場合、大地主の下での労賃が不当に低かった。そこでスラヴォニアやヴォイヴォディナの穀倉地帯を中心に労賃引上げの運動が組織され、大地主の下での労賃から順次改善されていった<sup>30)</sup>。

「経済同盟」の活動は、幅広く農業労働者から中小農に及ぶ層の切実な要求に対応した。団結を支えたのは、既に述べたクロアチア農民党の民族主義であり、反中央集権主義である\*\*。

\*\*1928年6月2日議会内の発砲事件により S・ラディッチは死亡する。中央集権派と反中央集権派

23) Cf. Ibid.

24) Cf. *Gospodarska Sloga*, 1 siječnja 1936, God. I, br. 1, str. 5.

25) R. Bićanić, "Križa nacionalizma", *Nova Evropa*, 1932, br. 5, str. 308.

26) Cf. Ibid.

27) Cf. *Gospodarska Sloga*, 29 kolovoza 1936, God. I, br. 17 a, str. 2.

28) Cf. Ibid., 1 travnja 1936, God. I, br. 7, str. 1-2.

29) Cf. Ibid., 23 svibnja 1936, God. I, br. 10, str. 4.

30) Cf. Ibid., 1 svibnja 1936, God. I, br. 9.

の対立こそがこの事件の原因であった。そしてこの事件の後議会の機能は麻痺し、国内全体が両勢力抗争の場となった。ユーゴはこうして国王独裁がしかれることとなった。ラディッチの後を継いだヴラトコ・マチュクも中央政府非難により投獄された。しかし34年10月、外遊中の国王が暗殺されるや反政府運動高揚の下、再びマチュクは政治活動を許されクロアチアを代表する指導者となった。

「経済同盟」は、第一回大会直前組合員を6千人からおよそ20倍の11万6千人に増やした。この時クロアチア農民党员・支持者は「経済同盟」に加盟すべしという原則が採用されたのである。組織上安定した時期を迎えた「経済同盟」の活動は、以後ますます多岐にわたった。

肉牛に加え小麦、牛乳など農・畜産物の販売近代化の運動が、特に活発であった。第一回大会直後開かれた小麦生産者の会議には、およそ300人の地方役員が出席し、小麦販売の方針が決定された<sup>31)</sup>。最低価格の遵守や出荷量を一定に保つため出荷時期を調整すること。そして協同の製粉作業を組織すること。税支払いを延期させ、収穫期の税支払いのため小麦を安値で売払うことのないようにすること。また収穫前の小麦を担保とした負債は、法律上無効であることを農民たちに徹底させること。等々の方針が機関紙を通して国内の小麦生産者に伝えられた<sup>32)</sup>。

オブチナ（ここではほぼ町村規模の地方行政機関）の活動は、クロアチア農民党の長期的な社会構想を示唆する。「経済同盟」機関紙においてビチャニッチは、オブチナが人民自治の機関に生まれかわるべきだ、と説いた<sup>33)</sup>。1938年8月、「経済同盟」に参加するオブチナの首長会議が開催された。席上ビチャニッチは、例えば一つのオブチナで獣医診療所を設置できないときは、オブチナの連合体（経済オブチナ）がこれを設置するよう提案した<sup>34)</sup>。またこの会議は市場入場税を適正な額にとどめること、オブチナが国に代わって行う業務については国が財政負担し、地方税政に負担をかけないことを決議した<sup>35)</sup>。こうして革新的オブチナの運動が広がり、クロアチアの約半数のオブチナが参加するようになった。

以上の活動を展開した「経済同盟」も、第二次大戦に伴う混乱によって39年秋以降、困難な時期を迎えた。開戦直前マチュクはセルビア中央政府と和解し、クロアチアは自治州となっていたが、この和解をめぐる、クロアチア農民党は分裂の危機に類した。そしてこの頃からユーゴ全体に、一方でファシズム運動が、他方で共産党の動きが活発となったのである。

しかし1939年までに20万余りの組合員を擁した「経済同盟」の活動は、全体として農民たちの結合を経済的な成果に変えたといえる。市場運動は、とくにめざましかった。家畜輸出組織化の試みは失敗したが、国内の家畜価格は大きく引き上げられた。税については、市場入場税の引き上げを防ぎ、ぶどう酒の消費税引き下げの運動にまで広がった。そ

31) Cf. Ibid., 10 srpnja 1936, God. I, br. 13, str. 6,

32) Cf. Ibid., 12 srpnja 1936, God. I, br. 14, str. 1-2.

33) Cf. Ibid., 1 ožujka 1938, God. III, br. 5, str. 1.

34) Cf. Ibid., 6 rujna 1938, God. III, br. 18, str. 4.

35) 同 上。

して地方税の運動は、前述のオプチナの改革運動に発展したのである。1942年2月『マルクスと農民』の著者デイヴィッド・ミトラーにあてた手紙のなかで、ビチャニッチは次の様に述べた。大恐慌後人民は、政治やその他の公共活動に関心を持つようになった。しかし事態の深刻さは、最早政党による旧来の政治を許さなくなった。人民自身の手による政治や公共活動が必要となったのである。「我々は政治、経済そして文化組織による人々の直接的な結合を試みた。これはヒットラーの侵略によって中断されたが、この時得られた経験は今も失なわれていない」<sup>36)</sup>。「経済同盟」運動から得たこの確信は、彼の思想の基礎となったのである。

## 二、R. ビチャニッチの思想と第二次世界大戦—「農民の国家」から農労同盟へ—

既に近隣の小国はナチス・ドイツの軍門に下っていた。1940年3月5日ビチャニッチは「農民及び人民経済研究所」\*の定期総会で、「農民の国家」の概略について講演した。それは各紙記者を前に世論に訴え、ドイツ軍侵攻前夜に農民運動の力を結集しようとする試みであった。彼は既に1938年、「クロアチア農民党史に関する手稿」において、「農民の国家」の経済構想を展開していた。そこで本章では、40年の講演を38年の「手稿」等で補促しながら、まず、「農民の国家」構想の全体像の再構成を試みる。そして関連する他の思想傾向を検討しながら、ビチャニッチの思想とその変化の特徴を明らかにしてみたい。

\*第一回大会以前『経済同盟』の活動が拡大されていく過程で、様々の問題に対する人民の発案を受けて専門的知識人がそれを如何に実現するかを検討していた。そして第一回大会において、それまで必要に応じて臨時に組織されていた専門委員会が、「農民及び人民経済研究所」として再結成された。ビチャニッチを所長とするこの研究所は、若手の経済学者や統計学者さらに医師をも招き、またマルクス経済学に近い人々をも含めた進歩層の知識人集団となった。それは農民たちの直接的な相互関係を助ける「人民的インテリゲンツィア」の集まりであった。そこから幾人かがのちにバルチザンの隊列に加わっていた。

### 1. 1940年のビチャニッチと「農民の国家」の構想

初めにビチャニッチは、この講演が「農民の国家」に関する最終的な理論体系を示すものではない、と断っている<sup>1)</sup>。それは「農民の国家」とは端的にいつて何であり、およそどのような外観を持つか、を示す試みであった。この講演では「農民の国家」に対する彼自身の構想よりも、それが第二次大戦下の混乱期に最低限満たすべき条件を示すことに重点がおかれた。そしてビチャニッチは、「農民の国家」は何よりもまず「複合国家」であり、またそれは「近代国家」の超克でなくてはならない、と述べる<sup>2)</sup>。

36) Cf. Letter from Rudolf Bićanić to David Mitrany, Feb. 25. 1942.

1) Cf. R. Bićanić, Tekst predavanja o seljačkoj državi, 1940, *Ostavština R. B. str. 1.* 及び *Novosti* 6. Mart 1940, br. 65.

2) Cf. R. Bićanić, *Ibid.*, str. 1.

「複合国家」の問題は第一にユーゴにおける連邦制の問題である。この講演の前年、なごらく対立をつづけていたセルビア中央政府とクロアチア農民党は「スポラズム（協定）」を結んだ（1939年8月）。こうしてビチャニッチは、「我々は、一つの中央集権的統一国家から、未だ誰もその最終的な形態がどうなるか知らないような国家組織へ移行しようとしている」<sup>3)</sup>と述べる。しかしこの連邦制については、困難な問題が待ち受けていた。それはビチャニッチによれば「超国家組織」の問題である。ビチャニッチは、国家の枠組を越えた協力体制の中心である国際連盟が沈黙してしまった現状に注意を促すのであった<sup>4)</sup>。とくに民族が混在する東欧では、一国内の諸民族が連帯したとしても、国家間協力がなければ紛争の火種は絶えない。そして彼は訴えた。東南欧の諸国は、ドナウ川流域に一つの超国家組織を作らなければ最早主権を維持することはできない、と<sup>5)</sup>。

互いに連帯することを「農民の国家」存立の必須条件としたこと。この点がビチャニッチ構想の一特性である。当時ナチス・ドイツの評価はクロアチア世論を分断していた。クロアチア農民党のなかにも、ナチスの「新秩序」を不可避的趨勢と見なす者もあった<sup>6)</sup>。これに対しビチャニッチは、39年のチェコスロヴァキア解体以後も、東欧諸国が連帯してドイツの圧力に対抗すべきであると主張したのである。この点は、ビチャニッチ1939年の著作『我国経済の方向性に関する国際的視野からの考察』に詳しく述べられる。それによれば恐慌以後一般化した各国の自給自足体制は、自給自足の戦時経済体制となった。そして様々な自給自足体制のうち、ユーゴがとりうる広域経済圏は、①ドイツの広域経済圏、②イタリアの広域経済圏③バルカンの広域経済圏、そして④海洋を通して世界全体と結びつく広域経済圏のいずれかである、とビチャニッチは述べる<sup>7)</sup>。そして彼は、前二者の危険性を指摘し、後二者の推進を支持した。とくにバルカンにおける経済ブロックが歴史上実在した点を彼は強調する。中世においてはビザンツの経済支配の下で、さらに15～18世紀にはトルコの支配下でこの地域は広い経済圏を形成した。また第一次大戦前にも、バルカン諸国の間で関税同盟を締結しようという動きがあったが、これは大国の干渉により失敗に終わった。しかし、恐慌以後再び、バルカン諸国の間には特惠措置を講じる動きが活発となった<sup>8)</sup>。たしかにベルサイユ体制を支持する国とこれに反対する国との根底的な対立が、このような協力に対する大きな制約となっていた。そしてこの点はビチャニッチ自身自覚するところであった<sup>9)</sup>。それでもなおチェコスロヴァキアが解体されたいま、バルカン諸国が協調することは、英仏との関係強化とともに、残された数少ない可能性のひとつであった。そこでビチャニッチは、この著作で次のようなバルカン連邦構想を提起する。それは、農民を主人公とする民主主義の体制によってユーゴ国内を再編成し、農民の

3) Ibid.,

4) Cf. Ibid.,

5) 同 上。

6) Cf. Ljubo Bodan, *Maček i politika Hrvatske Seljačke Stranke*, 1928/1941, Tom II, Zagreb, 1974, str. 344.

7) Cf. R. Bičanić, *Pogled iz svetske perspektive i naša ekonomska orijentacija*, Zagreb, 1939, str. 63-65.

8) Cf. Ibid., str. 93-97.

9) 同 上。

利益を実現しうる国家間の経済的共同体をまずブルガリアとの連帯によって形成することを内容とするものであった。ビチャニッチによれば、この連邦によって2300万の人口とアドリア海・黒海・エーゲ海におよぶ地域的一大勢力が形成され、さらにこの経済圏は中近東とも密接な経済関係を保ちうるものであった<sup>10)</sup>。

次に、「近代国家」の問題についてビチャニッチは、自由主義国家という「近代国家」は今日の状況にそぐわない、と述べる<sup>11)</sup>。技術の進歩は著しく、従来の法体系はもはやこれに対応できなくなった。「法治国家」とも呼ばれる「近代国家」は、大恐慌に至るまで国家形態の理想と考えられていた。しかし大恐慌は事情を一変させた。法の三権分立は生活が日毎に速度を増すのにたいし、あまりに緩慢で、事態に十分対処できないものとなった。こうしてほとんど全ての国々で政府の首長が、かつてどの君主も持ちえなかったような権限を持つようになった。さらにビチャニッチは、「法治国家」の最も重要な問題点を以下に指摘する<sup>12)</sup>。「法治国家」は秩序と治安を守り全ての市民が法を尊重するように配慮する、という。ビチャニッチは問いかける。しかしそれは誰のための治安であろうか。何が正義であるか、を一体誰が決めるのであろうか。「法治国家」の原則は強者に対し、弱者を意のままに左右しうる可能性を与える。果たして社会政策は弱者を保護するであろうか。弱者自身による国家の支配と国家による弱者保護にはあまりに大きな隔たりがあるのである。そこで大恐慌以後は、弱者保護を唱える「中立的な (nezainteresirana)」国家の代わりに、真実の、活動的なそして国民に直接関わる問題に取り組むような国家が求められるようになったのである<sup>13)</sup>。ビチャニッチによればこうして近代の超克を唱える国家が次々に発生した。イタリアにはファシズムの国家が出現した。ドイツには国家社会主義的国家が。さらにポルトガルやオーストリアにはキリスト教的協同組合国家の試みがある。同様にユーゴも何か新しい様式の国家運営を導入しなければならない<sup>14)</sup>。ビチャニッチは告発する。今日も諸政党の指導者や国会議員の中には未だ「法治国家」を国家形態の理想と考えているものがある、と。滑けいである。最早ヨーロッパに存在しない理想を今も固持しているからである<sup>15)</sup>。

以上のように国家形態を分析したのち、ビチャニッチは「農民の国家」について検討する。その特徴をより明確に把握するため、まず彼は「市民国家」や「労働者国家」を「農民の国家」と比較する。ビチャニッチによれば「市民国家」は、都市の理念が国家に適用されたものである<sup>16)</sup>。そこでは中世の都市で発達した制度が、国家制度となっている。19世紀初めの一般市民法典には、それが都市民の法であり、農民たちには特別の法が定められる、と書かれていた。しかし市民法は、すべての住民に適用されるようになった。経済組織についても同様である。ギルドは、カルテルとして国全体を支配した。国家行政はブ

9) 同 上。

10) 同 上。

11) Cf. R. Bičanić, *Tekst predavanja o seljačkoj državi*, opet. cit., str. 1.

12) 同 上。

13) 同 上。

14) Cf. *Ibid.*, str. 2.

15) 同 上。

16) 同 上。

ルジョアジーが支配している。都市は政治と富の中心となった。都市の郊外は都市によって搾取されるのであった。こうしてビチャニッチは、「我国においていかに市民国家の理念が支配的であるかを知るのである」<sup>17)</sup>と述べる。次に「労働者国家」とは、ビチャニッチによれば、労働者の現実から作り出された理想である。そしてこの好例はロシアに見られる。そこでは国家組織全体の基礎は工場であり、工場の理念が国家全体に適用される。国家は巨大な工場となり、ソヴェトがこれを管理する。そして農村も同様に工場となるのであった<sup>18)</sup>。以上のように「市民国家」と「労働者国家」をみたのちビチャニッチは、「農民の国家」とは農村を国家全体の領域に拡大したものだ<sup>19)</sup>と述べた。彼は聴衆にユーゴ農村の伝統を思い起こさせる。資本主義以前の農村において、各農家は互いに協力しあっていた。とりわけクロアチアでは牧畜が盛んであったため、大規模な共有林や共同の牧草地があった。村々には共同の粉ひき小屋があり、農民たちは定められた順番に従い、粉をひいていった。農民だけでなく、かつての農村には車大工や靴職人もいて、農村全体の必要を満たしていた。この様な農村を国家に拡大して考えると、「農民の国家」においては全ての天然資源が、かつての共有林のように人民共同の所有物となる。かつて村の職人達が村全体の必要を満たしたように、工業は近代的「農民の国家」全体に奉仕するであろう、とビチャニッチは述べる<sup>20)</sup>。

将来に向けた工業化構想については、38年の「手稿」に詳しい。工場の設置は、彼によれば、自然的条件がそろい、かつ農業だけでは人々が生活できないところで行われなければならない。さらに森林や鉱山なども人民全体に奉仕し、その所有に服すべきものと彼は考えた<sup>21)</sup>。この様に鉱工業は農業と農民のために方向づけられるというのが、彼の経済政策の特徴である。そして銀行も人民の統制を受け、保険会社は社会化されねばならないと考えたビチャニッチは、自ら1940年には国民銀行（但し中央銀行）の株の政府による買上げを実施した<sup>22)</sup>。総じて現在の私企業は、経済計画に従わねばならないというのが彼の原則<sup>23)</sup>であり、その基礎には次のような彼独自の企業観<sup>24)</sup>がある。企業の所有主は、その企業の公的な「譲り受け入 (concessionnaire)」として人民の利益に従わなければならない。社会的に有用な企業の経営は所有者の私事にとどまらないからである。労働者については、団結と組合活動の自由を認めなければならない。また生産における対等な要因としての労働者の経営参加を保障すべきである。しかし、工場はあくまで人民全体に奉仕すべきものであり、そこに働く労働者たちだけに奉仕するものではない。こうして彼の経済思想には、人民による経済統制の原理が貫かれており、人民の利益とは第一に農民の利益を意味するのである。

17) Ibid.

18) Cf. Ibid.

19) Cf. Ibid, str. 2-3.

20) Cf. R. Bičanić, Rukopis o historiji HSS, Ostavština R. B., str. 9.

21) 同 上。

22) Cf. Gospodarska sloga, 1 kolovoza 1940. Godina V. br. 5, str. 1. 及び 1 listopada 1940 Godina V. br. 19. str. 1.

23) Cf. R. Bičanić, Ibid., str. 9.

24) 同 上。

以上がビチャニッチによる「農民の国家」の特徴把握である。ただし過去の農村から「農民の国家」への推論については注意を要する。それは、伝統的な農村共同体の単純な再生と捉えられてはならず、協力の精神を守りながらも、いわばより合理的な新しい共同体へ変わるものと考えらるべきであろう。伝統的な農村共同体の崩壊について、ビチャニッチは自ら分析しており、またそれが再生しうるものではないことを彼は熟知していたからである\*\*。(この点については、第二次大戦中の農村組織の構想に注目すべきである)。

\*\*クロアチアの先進地域では19世紀終盤の農業恐慌によりこのような共同体が崩壊したことをビチャニッチは小論「1873-95年、クロアチアの農業恐慌」で分析した<sup>25)</sup>。また農村調査に訪れた後進地域でも、その崩壊が進んでいた。農民たちによれば、その主な理由は、一つの大家族の世帯人員が増加し、とくに男子の増加が問題となったこと、また世帯人員の増加により、相対的に土地が狭く感じられるようになり、土地分割による集約的利用が図られたこと、そして、他村との婚姻による慣習の多様化も大家族制崩壊の要因となった<sup>26)</sup>。こうして独立した農民たちは、最早大家族制に復帰することを望まず、独立した世帯の間の協力によって経済的困難を凌ごうとしたのである。

講演の後半部分でビチャニッチは、「農民の国家」における農民の役割の問題そして権力組織の問題について検討する。まず農民とは何であるかについて明確にしておかなければならない。クロアチア農民党は身分制の時代に生まれ、身分制の否定から出発した。ここではじめにビチャニッチは、「我々にとって農民階層 (seljaštvo) は身分ではない」<sup>27)</sup>と述べる。農民階層は、マルクスなどがいうような意味での階級でもない。それは資本家階級でも労働者階級でもない。農民階層という概念は、資本主義以前のカテゴリーに属する概念である。そして彼は、クロアチアでは「農民階層とは人民である」<sup>28)</sup>と主張した。既に述べたようにクロアチア農民党の理念においては、「外国文化」の担い手であるごとく少数の「旦那衆」に反対し、圧倒的に優勢な農民階層が「民族文化」を守るからである。ビチャニッチはなおも議論をつづける。個々の農民という概念は、厳密に言えば、農業労働者（土地を持たず、ただ他家の農地を耕す者）や農業従事者（自ら耕作するか否かにかかわらず土地の作物により生活を営む者）といった経済的概念とも異なる。「クロアチア農民運動において農民という概念は、農民文化に属する者を意味する。農民文化に属する者とは、農民の伝統や農民の生活様式、農民の共同体 (kolektiva) との関わりを断ち切らなかつた者を意味する」<sup>29)</sup>。従ってビチャニッチによれば、労働者や教師のような土地を耕作しない者も農民文化に属するかぎり農民でありうるものである<sup>30)</sup>。そしてこの農民文化に属さなくとも、少なくともこれを支持する者全ての総称が人民である<sup>31)</sup>。但しこの人民

25) Cf. R. Bićanić, "Agrarna kriza od 1873-1895 i njezin utjecaj na ekonomsku i socijalnu strukturu Hrvatske", Ekonomist, Zagreb, 1937. br. 5, str. 201-204.

26) Cf. R. Bićanić, Kako živi narod, opet. cit. str. 107-109.

27) R. Bićanić, Tekst predavanja o seljačkoj državi, opet. cit., str. 3.

28) 同 上。

29) 同 上。

30) Cf. Ibid.

31) 同 上。

の間でも農民がクロアチアの文化を最も顕著に代表するのである<sup>32)</sup>。

この主張は特に検討を要する。S. ラディッチ以来、労働者にも土地が確保され、彼らが農耕から切り離されることを防ぐべきだという主張が、クロアチア農民党に受けつがれた<sup>33)</sup>。ビチャニッチ自身38年の「手稿」で同様の主張を行っている<sup>34)</sup>。手稿とこの講演の間には、農民概念に関する一つの論争があった。ビチャニッチによればこの論争のうち、クロアチア農民党の運動を農民の運動に限定しようとしたグループが指導部から追放された<sup>35)</sup>。それは、(階層を越えた)民族運動と(労働者と農民が連帯する)人民運動とにその運動が分裂する契機となった。そしてビチャニッチは後者を選ぶのであった。たしかに量的には人民のなかで農民が圧倒的な比重をもつ。ビチャニッチによれば、当時のユーゴ全体でも1,100万の農民がいたのに対し、労働者の数は200万でしかなかった<sup>36)</sup>。しかし30年代末から活発化した労働運動、他方青年・学生を奮い立たせるファシズム運動は、農民運動の危機を招いていた。そしてクロアチア農民党はこれに対処しなければならなかったのである。

次に権力の問題についてビチャニッチは、以下の様に述べる「農民の国家」とは農民大衆の要求と必要にそって権力が組織される国家である<sup>37)</sup>。具体的に、その権力は三権に分けられるのではなく、立法権と行政権は統一され、その代わりに司法権が一層強化される<sup>38)</sup>。しかしクロアチア農民党の綱領からすれば、権力の問題は、むしろ経済をいかに組織するかにある。「農民の国家」の組織体系を形作る第一の基礎単位は、農民世帯である。当面恐慌以後の経済的困難のもと、農民世帯はまず自給度を高めなければならない<sup>39)</sup>。「手稿」によれば農民世帯の各々は、第一に自分たちの必要を満たし、そののち余剰生産物を市場に出荷すべきである。そのためには農業生産の向上を図らねばならない。積年の飢餓と負債に喘ぐ後進地域も、まずこのことから始めるべきである。このような地域では、農業生産の可能性が十分に活用されていないのである。また一般に、家内工芸をより活発にすることは生活用品の自給さらに副業の促進につながるのである。ビチャニッチによれば、こうして資本主義的貨幣経済への依存を農民たちが少しずつ弱めることが肝要なのであった<sup>40)</sup>。社会組織の第二の形態は農村である。複数の農村からなる共同体が「経済オプチナ」として組織される。それは共同体であって種々の協同組合の集合ではない。「農民の国家」を協同組合国家と呼ぶのは誤りである。クロアチア農民党の理念において国家とは、経済的な役割を担う自治的なオプチナの集合である。そしてこのオプチナは共同の生産手段による共同経営を行う<sup>41)</sup>。この点は「手稿」がより詳しい。それによると、農村を

32) 同上。

33) Cf. I. Šarinić, opet. cit., str. 81-85, 120.

34) Cf. R. Bićanić, Rukopis o historiji HSS, opet. cit., str. 6-7.

35) Cf. R. Bićanić, Tekst predavanja o seljačkoj državi, opet. cit., str. 3

36) Cf. Ibid., str. 4.

37) 同上。

38) 同上。

39) 同上。

40) Cf. R. Bićanić, Rukopis o historiji HSS, opet. cit., str. 8.

41) Cf. R. Bićanić, Tekst predavanja o seljačkoj državi, str. 4.

経済的共同体として組織化することによって、農民の所有が小規模であるという弱点が補われる。そのためには、共同製粉所のような共同の機関を強化または新しく創設しなければならない。協同組合はこうした機関の一つとして重視される。農業生産は、農機具の共同購入や使用、商品の共同購入や農産物の共同販売によって高められなければならない。そして農村は、農民のプロレタリア化を防ぎ、とくに土地なし農民について土地を得るまでのあいだ援助を行う。一方、高利貸商人など農村内の社会的寄生主は葬り去られねばならない<sup>42)</sup>。「経済オブチナ」のうえにおかれる第三の組織は、農民階層全体の協同組織である<sup>43)</sup>。「手稿」でビチャニッチは次の様に述べる。農業生産の広域化を導入し、それにもとづいて様々の地域の農民たちが商品を直接に交換することはきわめて重要である。このような国内市場の組織化により、小麦など農産物価格の地域差や季節変動が減少する。とりわけ農産物と工業製品の価格格差が解消されなければならない<sup>44)</sup>。「農民の国家」では、農民の利益にもとづいて他の階層・産業分野が調節される。ビチャニッチは、各職業階層が対等に協力しあうことを唱えた、カトリック教会の「職能国家」論に反対する。それは農民の指導性について正当に考慮していないからである<sup>45)</sup>。このカトリック教会の国家理念は、西欧の工業国に向けられたもので、農業国に適するものではないのである。最後にビチャニッチは、「新秩序」の国家体制を断罪する。イタリアでは国家が崇拜される。我国では人民が崇拜される。ドイツでも現在の国家理念は、人民を最重要視する。しかしこの場合人民とは、人種を同じくするごく限られた人々を意味する。ビチャニッチは訴える。我々は人種や民族の別なく働く人民のための民主主義を支持する。何を作り、何を誰が消費するかを人民自身が決めるのでなければならない<sup>46)</sup>、と。

## 2. ビチャニッチと「自信を持った農民」—「農民主義」から「新人民主義」へ—

ビチャニッチの「農民の国家」構想は S. ラディッチの思想に概ね従っている。「農民の国家」は、家から農村へ、そしてオブチナから更に大きな地方自治単位へ、「下から」国家を再編成する試みである<sup>47)</sup>。S. ラディッチは、人民投票制導入を始めとして、主権の行使は人民自ら果たすべしというルソーの人民主権論を更に徹底させようとした<sup>48)</sup>。経済については V. マチュクが協同組合の振興による工業化や生産力向上を唱えた<sup>49)</sup>。しかし40年のビチャニッチの主張からすれば、協同組合は「経済オブチナ」の一機関とみなされた。次に運動の大きな流れからすれば、S. ラディッチの時代は経済闘争よりも、道徳上、理念上の闘争に重きが置かれたといえよう。そしてマチュクやビチャニッチの時代は、

42) Cf. R. Bićanić, Rukopis o historiji HSS, opet. cit., str. 8.

43) Cf. R. Bićanić, Tekst predavanja o seljačkoj državi, opet. cit., str. 4-5.

44) Cf. R. Bićanić, Rukopis o historiji HSS, opet. cit., str. 8-9.

45) Cf. R. Bićanić, Tekst predavanja o seljačkoj državi, Ostavština R. B. str. 5. ビチャニッチのこの主張に対し、カトリック教会は即座に反論した。その反論のなかで教会新聞は、マチュクが39年11月にカトリック教会に忠誠を誓った事実をあげ、教会批判を行ったビチャニッチの責任を追求した。この点については、Cf. Katolički list, 14 ožujka 1944, Zagreb, br. 11, str. 121-123.

46) Cf. R. Bićanić, Tekst predavanja o seljačkoj državi, opet. cit., Ostavština R. B., str. 5.

47) Cf. I. Šarinić, *Ideologija hrvatskog seljačkog pokreta*, opet. cit., str. 79-80.

48) Cf. I. Šarinić, *Hrvatska seljačka demokracija*, Zagreb, 1937, str. 173-179.

49) Cf. I. Šarinić, *Ideologija hrvatskog seljačkog pokreta*, opet. cit., str. 93-95.

「経済同盟」や独自の労働運動（この党は「クロアチア労働同盟」を組織し、労働運動にも大きな影響を与えた）により、恐慌からの防衛にとどまらず、近代化への経済的運動の端初がついに開かれたかに思われた時期であった。

このようなクロアチア農民党のなかでもビチャニッチは、人民を信頼し、その力に依拠しようとした点できわだっていた。そしてロンドン亡命政府に加わっていた大戦中のビチャニッチは、この考えから同党の蔵相シュティと衝突した。亡命中とはいえ国民銀行の財政政策は祖国人民の利益に従う運営を原則とすべきである、とビチャニッチは考えた<sup>50)</sup>。彼が国民銀行副総裁の職を辞したことは、クロアチア農民党の領袖シュティの現実政治ではなく、この党の基本理念を選んだことを意味する。そして祖国の農民たちは、ビチャニッチによれば、第一次大戦の時と同じく食糧供給者としての自覚を強めていた。彼らは、「自信を強めていた」のである。その最もよい証拠は、多数の農民がゲリラ闘争に参加したことであった<sup>51)</sup>。またこのように自信を深めた農民たちによって新しい共同体が形成されるであろう、とビチャニッチは予測する<sup>52)</sup>。戦時下の困難な生活条件が農民たちに自給の重要性を痛感させ、村落共同体の社会的結合を強めるからである。そして彼は、戦後のユーゴ農村の発展は、共同体の破壊ではなく共同体全体の生産の向上によって農民たちの生活を改善するものでなければならない、と主張した<sup>53)</sup>。彼にとって共同体の破壊による社会発展は、19世紀のものであり、近代科学を農民生活と両立させ、あくまで農業発展を中心としながら、同時に工業化をすすめることが今日的な社会発展のあり方であった<sup>54)</sup>。「自然的条件がそろいかつ農業だけでは生活できない」地域での工業化という原則とあわせて、ここにビチャニッチ流の農工統一論が浮かんでくる。

工業化について東欧の農民運動は、時期と各国の事情に応じて変化をみせてきた。工業化に対して最も厳しい姿勢をとったのはスタンボリースキのブルガリアであった<sup>55)</sup>。工業は農民が消費する製品の製造に限られ、工場労働者に対する監視も厳しく、1920年の鉄道ゼネストは軍によって制圧された<sup>56)</sup>。次に1930年代多くの労作を発表したルーマニアの経済学者ヴィルジル・マジャールは、各国の経済的能力に応じた工業化を唱えた<sup>57)</sup>。工業は農民を主要な消費者と考え、彼らの消費する製品や農機具の生産を中心とするものと想定された。その資本力と資源に応じたレベルでルーマニアの工業化が行なわれるべきである、とマジャールは考えた。他方彼は保護主義に反対し、国内の協同組合の整備と農業生産の近代的分業体制の確立による生産力向上を図り、少しずつ西欧との経済取引を増大させることを主張した<sup>58)</sup>（マジャールが西欧との経済取引を重視したことは、ラテン系のルーマニアがスラヴ諸国との協力に不信を抱いていたことを物語る。ビチャニッチが、西欧との貿易を各国が強化する以前に、東欧諸国が互いに連帯することにより一大経済圏を築こうと考えたのと対照的であった）。工業化が既に発達していたチェコスロヴァキアでは

50) Cf. Pismo Rudolfa Bićanića Juraju Šuteju 16 XII, 1942, Ostavština R. B.

51) Cf. R. Bićanić, "The Effects of War on Rural Yugoslavia", *Geographical Journal*, London, No. 1, 1944, p. 16.

55) Cf. G. Ionescu & E. Gellner (ed.), opet. cit., pp. 109-111.

56) 同 上。

57) 同 上。

58) 同 上。

協同組合の普及促進と並行して一層の工業化が図られた。この国の農業者党は工業化の必要をはっきり認めていた。しかし党首ミラン・ホジャは、専ら利潤追求のための工業化は、コモン・センスまたは計画化によって防がなければならない、と考えた<sup>59)</sup>。ビチャニッチの工業化に対する態度は、スタンボリースキほど厳しいものではなかったが、ホジャほど楽観的なものでもなかった。チェコスロヴァキアに比べ工業化に対する人民統制はユーゴの場合はるかに厳しいものと考えられた。マジャールの主張と比較すれば、工場の生産についてビチャニッチは具体的制限を設けていない。このようにビチャニッチの構想は、「新しい共同体」論と同様に具体像を示さず、問題は開かれたままとされた。しかし彼の構想のベースには農村調査があり、予め体系をつくるのではなく、絶えず現実から理論を作りだそうという姿勢があったことも忘れてはならないだろう。

この農工統一論を背景として、ビチャニッチは労働者が農民の唯一の同盟者であることを公然と認めるようになった。抵抗運動の中で急進性を高めた農民たちも、最早労働者の「破壊的な」<sup>60)</sup>気質をおそれることはなかった。44年党副総裁への手紙のなかでビチャニッチは次の様に述べた。「クロアチア農民党は、今日の人民の必要と彼らの気運に応じてそのプログラムと政治活動の諸方策を大きく変更しなければいけない。それは根本的に左傾化しなければならない。そして…クロアチア農民党の運動をある種のブルジョア的な民族運動に変えてしまおうと望む、右派勢力を排除しなければならない。右傾化することは、党と運動を滅亡に導き、そして農民大衆を党から遊離させるであろう。何故ならその道に進むことは、人民の要求を満たすこととなりえないからである。むしろ農民と労働者の持続的な同盟がクロアチアの農民大衆によりよい将来をもたらしうる唯一の真の政治的結合である」<sup>61)</sup>。

こうして共産党との協力に向かったビチャニッチの「新人民主義」は、連邦主義とも不可分に結びついてきた。ビチャニッチら左派の政治組織をクロアチア農民党の右派、中道派のそれと分けたものは、ファシズムの脅威への対処と「複合国家」の問題である。1930年代末からクロアチアでは、失地を回復し大クロアチアを形成しようとする勢力ウスタシャが台頭してきた。彼らはイタリア・ドイツの支持を受け、1941年4月には「クロアチア独立国」を樹立した。クロアチア農民党指導部のなかからこの「独立国」政府に加わる者も現われた。ビチャニッチはロンドンから一早く、この政府がかいらい政権であり民族の正当な代表ではない、と訴えた<sup>62)</sup>。中道派を形成したマチェクは、39年クロアチア自治州の成立以後は、ナチス・ドイツの脅威があったとはいえ、クロアチア以外の諸民族の自治要求に答えて連邦制を追求することはなかった。さらに彼は、ナチス・ドイツに対し外交上譲歩を重ねながら、現実には独軍によって占領されるまで、一貫してユーゴの外交的中立は守りうると考えていた。そして占領下の待機主義は、マチェクに対する農民たちの支

59) 同上。

60) 既に引用した *Ideologija hrvatskog seljačkog pokreta* の著者イヴォ・ジャリニッチは、土地を所有しそこから価値を得る農民の気質が建設的であるのに対し、企業家の財産価値の向上としばしば敵対する労働者は破壊的な気質を持っている、と述べた。Cf. I. Šarinić, opet. cit., str. 116.

61) Pismo Rudolfa Bićanića Juraju Krnjeviću, 日付不詳, 1944, Ostavština R. B.

62) Cf. R. Bićanić, Tekst BBC radio govora, 1941, 10. XII, Ostavština R. B.

持を失わせた。

ナチ占領体制の下で、クロアチアとセルビアの両民族の間で大量虐殺が行なわれた。民族の存亡自体が危うくなった。ダルマチアでは1943年1月クロアチア農民党の下部党员がパルチザン運動に参加し始めた<sup>63)</sup>。6月には、クロアチア農民党中央指導部左派の一人物、フィリップ・ラクージュは、マチュクの右傾化と解放闘争に対する消極性を非難した<sup>64)</sup>。またこの頃から、旧「経済同盟」理事のB.ズラタリッチ、「農民及び人民経済研究所」に属したスレメツ夫妻などがパルチザン運動に加わっていった。そしてビチャニッチも、この年11月政府から離れ、一人パルチザンへの協力を国内同胞に呼びかけた<sup>65)</sup>。ロンドンに到着した当初彼は、他の東欧諸国の農民運動家とともに東欧連邦構想に取り組んでいたが、東欧が大国の勢力圏に取込まれていくにつれ、連邦ユーゴとして南スラヴの諸民族が団結することに唯一の希望をみるようになっていた。その団結は、各民族固有の歴史的伝統を互いに尊重することによってはじめて実現されるものであった<sup>66)</sup>。さらにビチャニッチはこのような連邦主義は将来にわたりファシズムと独裁が再び登場する危険性を取り除くものである、とも考えた<sup>67)</sup>。

以上のようなビチャニッチの思想と、ドラゴリューブ・ヨヴァノヴィッチの思想は微妙に交錯する。彼は農民社会主義の理想からファシズム反対を唱え、第二次大戦中パルチザン運動に加わった。かつて獄中生活を共にした彼は、ビチャニッチの農民運動への参加に大きな影響を与えた。ヨヴァノヴィッチは、セルビア農民党左派の指導者であった。彼にとって農民の敵は、資本独占と都市の支配である<sup>68)</sup>。農民社会主義は以下の原理を掲げ、この両者とたたかう。第一に、それは労働がすべての価値を創造すると考える。そして第二に土地が尊重されなければならない。第三に、労働者が平等を要求するのに対し農民は社会的正義を求める。第四に、ブルジョアが競争を、労働者が共同所有 (Kolektivizam) を原理とするのに比べ、農民は共同経営 (Kooperacija) を原則とする。最後に、ヨヴァノヴィッチは農民は絶えず啓発されねばならない、と主張した。こうして農民社会主義は、自由意志により形成される地域共同体、その連合としての国家さらに民族相互の連合を求めるのである。バルカンとドナウ沿岸諸国は、このような農民社会主義に適し、ソ連とも協力して一つの「労働民主主義」の体制を築いてゆかなければならない。この体制では、各国が人民主権と地方自治の制度をとり入れ、自らの労働によってのみ全ての権利が得られるのである。そしてこの民主主義は、労働者と農民が互いに協力してはじめて達成される<sup>69)</sup>。

63) Cf. Milica Bodrožić, "O nekim pitanjima politike Hrvatske Seljačke Stranke prema NOP-u u Hrvatskoj 1943 godine", *Časopis za suvremenu povijest*, Zagreb, 1973, Godina V, br. 1., str. 37.

64) Cf. Ibid., str. 43.

65) Cf. R. Bićanić, Tekst BBC radio govora, 1934. 11. XI.

66) Cf. R. Bićanić, Typewritten text of "The Problem of Serbo-Croat Relations", 1943, pp. 12-15.

67) Cf. R. Bićanić, Typewritten text of Speech at Federal Union Meeting, June 12th, 1942, p. 6.

68) Cf. Dragoljub Jovanović, *Socijalizam i seljaštvo*, Beograd, 1941, str. 40.

69) Cf. Ibid., str. 47-58.

「下からの」国家形成や国家連合の構想は、全体として両者の間に共通するものである。しかしフランスで法学を修めたヨヴァノヴィッチは、「自由意志」や「連合」を、土着の農民の具体的な姿よりも抽象的な「労働」の概念を強調する。セルビア農民党は、協同組合運動を母体として発足し、ヨヴァノヴィッチらのグループが左派を形成した当時は内部分裂がすすんでた。この政党への農民の政治的支持そのものが必ずしも大きいものではなく、内部分裂はさらにこの支持を分断した。後に離党し新党を結成したこのグループの運動は、勇敢ではあったが、大衆的な運動であるよりむしろ知識人の運動であった。パルチザン運動に貢献したヨヴァノヴィッチは、戦後国会議員となった。しかし共産党が農業集団化を強行したときこれに反対し、以後公的な政治活動から退くこととなった。一方ビチャニッチはこの集団化に対し、次章に述べるように、「沈黙」を守った。ビチャニッチは、共産党の政策といえど変りうるという見通しをもっていた。そしてビチャニッチは、ユーゴ農民の抵抗精神と力に対し、ヨヴァノヴィッチ以上に深い信頼を寄せていたように筆者には思われる。

### 三、結びにかえて-ビチャニッチの思想とユーゴ史の底流-

解放の興奮が知識人の冷静な洞察を微妙に狂わせた。パルチザン運動によって自力で祖国を解放したユーゴは、終戦後共産党に対する国民の絶大な支持を背景として急速に復興を推し進めていた。1946年ビチャニッチは、小論「我国の社会構造における一断層」において、旧体制が何故にほろび、新しい社会がいかに生れようとしているかについて述べている。そして、注目すべきことに、旧体制との闘争において最も大きな役割を果たしたのは共産党であったとしたのである<sup>1)</sup>。

しかしビチャニッチと共産主義者たちの「蜜月時代」は、それほど長くは続かない。1945年2月の帰国以来外国貿易局長をつとめていた彼は、一年余りののちこの職を辞して母校ザグレブ大学の経済学を担当することとなった。彼が生涯敵対した中央集権体制が形成されつつあったのである。(現在のユーゴでは終戦から48年までの時期は「国家中央集権制」の時代と呼ばれることが多い)。その間はビチャニッチにとって「沈黙」の時代であり、主に経済史の研究が中心となった。だが「沈黙」は、必ずしも「服従」を意味しなかった。ビチャニッチは、クロアチアの封建制の打破については農民が決定的な役割を果たした、と主張した。1948年クロアチア農奴の解放100年にあたり、ビチャニッチは次の様に述べた。1848年の農奴解放は、農民たちの反乱や一揆の圧力に屈した当時の支配層が、全ヨーロッパをおおった革命的情勢の中で、農民の解放を認めざるを得なかったものである<sup>2)</sup>。しかし情勢の鎮静化とともにオーストリア皇帝さらにクロアチア支配層は、その要求の実現をひきのばし、ようやく1876年になって農奴制を廃止した<sup>3)</sup>。ビチャニッ

1) Cf. R. Bićanić, "Jedan presek kroz našu društvenu strukturu", *Kolo matice hrvatske*, Zagreb, 1946, str. 219.

2) Cf. R. Bićanić, "The Liberation of the Serfs in 1848", in Doreen Warriner (ed.), *Contrasts in Emerging Societies*, London, 1965, pp. 335-338. なおこの論文は "Oslobodenje kmetova u Hrvatskoj 1848", *Djelo* br. 3, 1948 が英訳されたもの。

3) Cf. *Ibid.*, p. 341.

チによれば、「事實は、クロアチア農奴が1848年フランスの労働者によって開始されたヨーロッパの偉大な革命運動の道筋に従った時、彼らは彼ら自身を解放したということを示している」<sup>4)</sup>のである。農奴たちは、いかなる法令も総督による布告をもあてにせず、自ら闘ったのだと彼は述べる。この時期のビチャニッチの経済史研究は、『クロアチアとスラヴォニアにおけるマニファクチュア期～1750-1860～』と題された著作にまとめられた。本書で最初に注目をひく叙述は、オーストリア専制のもとでの資本主義化の過程で大資本家はクロアチアのナショナリズムに関心を示さなかった、としたことである<sup>5)</sup>。ビチャニッチによれば、オーストリア・ハンガリー帝国という多民族大国家の内では、大資本家たちがクロアチアのナショナリズムから得るところは限られていたのである<sup>6)</sup>。そこで「20世紀初頭までクロアチアのナショナリズムは、小市民階級のナショナリズムとして残った」<sup>7)</sup>、とビチャニッチは分析する。クロアチアナショナリズムの担い手について、この著作はマルクス主義歴史家から多くの批判を受けた。彼らは、封建制末期クロアチアの市民階級は未成熟で、政治的に何ら重要な役割を担うことはなかった、とした。批判者の一人<sup>8)</sup>によれば、資本主義もナショナリズムも外部のヴォイヴォディナから、その市民階級によってクロアチアにもたらされたのであった<sup>9)</sup>。対するビチャニッチは、クロアチアの資本主義は内部から発生し、ナショナリズムはクロアチアの市民階級によって形成された、と反論した<sup>10)</sup>。この階級は強力ではなかったが、批判者がいかにひどく弱なものでもなかった、というのである。

こうして終戦直後から50年代初めにかけてビチャニッチは、現実の政治問題には「沈黙」を守りながら、学究として画一的な歴史解釈に抵抗した。一方、1948年ユーゴ共産党はスターリンによってコミンフォルムから除名された。しかしそれは、この国の社会主義にとっては幸運であった。これ以後ユーゴ社会主義は独自の方向を進みはじめた。そして50年代半ばからのビチャニッチは、農民家庭の生活実態の分析に精力を傾け、次々と論文を発表していく<sup>11)</sup>。「農民世帯における農業以外の職業」1955、「1953年から55年までの期間におけるユーゴ及びクロアチア農民世帯の所得～その分析的研究～」1956、「1955年のユーゴにおける農民家庭の個人所得とその配分」1957、「所得配分による農民・労働者混合家庭の諸類型」1959)。戦後の急速な工業化の過程で労働者階級が急速に成長した。し

4) Ibid.

5) Cf. R. Bićanić, *Doba manufakture u Hrvatskoj i Slavoniji (1750-1860)*, Zagreb, 1951, str. 258.

6) 同 上。

7) Ibid.

8) この批判者とは歴史家ヴァソ・ボグダーノヴであり、ビチャニッチと *Hrvatsko kolo* 誌上で論争を交した。

9) Cf. R. Bićanić, “Suština jednog naučnog spora, *Hrvatskokolo*, br. 3, 1952, str. 184-185.

10) 同 上。

11) 括弧内の論文については、以下の諸誌を参照されたい。“Nepoljoprivredna zanimanja u seljačkom gospodarstvu”, *Statistička revija*, br. 2, 1955. “Dohodak seljačkog gospodarstva u FNRJ i NRH u razdoblju od 1953-1955 g. Analitički pregled”, *Ekonomski pregled*, br. 8-9, 1956. “Distribucija osobnih dohodaka seljačkih obitelji u FNRJ 1955 g.”, br. 3, 1957. “Tipovi miješovite seljačko-radničke obitelji s obzirom na raspodjelu dohotka”, *Sociologija*, br. 1, 1955.

かしビチャニッチは、これらの論文のなかで新しい労働者階級がいかに農業との関わりを保ち続けているかを追究した。彼は、将来農業の重要性が再び見直され、技術の進歩も手伝って、農業と工業がいずれ両立されるであろうと予想した。1965年に行われたソ連・東欧の農業問題に関する国際シンポジウムで、彼は次のように発言している。農業と工業の間には、対立関係と同時に相互依存の関係が存在する。そして今後の見通しとしては、将来両者の相互影響が強まり、対立は克服されるであろう<sup>12)</sup>。このように述べたあとビチャニッチは、科学的調査に基づく近代的な農業の形態を開発することが重要である、というかつてロンドンで明らかにした考えをくりかえした<sup>13)</sup>。そして公害によって汚染された工業化社会に代わって、人類社会の進歩は、社会制度の変革により全てを自然に回帰させることを可能にすべきである、と主張する<sup>14)</sup>。ビチャニッチは長期的に、そしてかつ柔軟に農業問題に対処しようとした。彼は、共産圏諸国政府の農業政策は不変のものではなく、現に農産物の不足によって政策が変わる可能性がある、と述べた。農村の問題も画一的に把えるべきではない。戦後のユーゴでは、農村の子弟が「新しいもの」を求めて都会へ流出していく傾向が見られる。しかし若者たちにとって何か新しいものは、現在の大人が新しいと考えるものとは違うかもしれない。特に、社会発展の度合や家族構成そして生態学的な条件などを異にするユーゴのような多民族国家では、「新しいもの」は非常に多様な形態をとりうる、とビチャニッチは示唆する<sup>15)</sup>。

ビチャニッチの農工統一の思想は、根本的には変化をしていないように筆者には思われる。そして彼は、再び経済政策上の提言を行っていくなかで、第二次大戦前と同様に経済運営の分権化を主張した。世界各国の経済発展を分析した結果彼は、一般にある国の経済発展にとっては、中央集権よりも地方分権が、あるいはユーゴの例が示すように、指令の集中よりも計画による意思統合の方が好ましい、と結論づける<sup>16)</sup>。こうして1960年代のビチャニッチは、ユーゴの経済改革を支持した。ただしその経済改革は、企業の運営や経済の計画における非集中化、非国家化、非政治化そして民主化を原則とすべきであると述べた<sup>17)</sup>。この主張の背後には、「複合国家」の思想が見えかくれしている。60年代のユーゴには経済改革による分権化を求める勢力とこれに反対する勢力とがきわめて拮抗していた。そして改革を求める勢力は、スロヴェニア人とクロアチア人さらにクロアチアに住むセルビア人からなり、これに反対する最大勢力はセルビア人たちである。彼に従えば、戦間期と類似した民族対立が、社会主義ユーゴでも発生していた。この分析からビチャニッチは、国家による富の「政治的な」分配を経済改革によって改めることなしに、民族対立を解消することはできないと考えたのである<sup>18)</sup>。

12) Cf. R. Bićanić, "Comments on Farming as a Way of Life: Yugoslav Peasant Attitudes", in J. F. Karcz (ed.), *Soviet and East European Agriculture*, Univ. of California Press, 1967, p. 383.

13) 同 上。

14) 同 上。

15) Cf. *Ibid.*, p. 384.

16) Cf. R. Bićanić, *Turning Points in Economic Development*, Hague, 1972, p. 17.

17) Cf. *Ibid.*, p. 243.

18) Cf. *Ibid.*, pp. 244-245.

人民自身の手による経済運営という原則は、ビチャニッチが死の直前まで主張しつづけたものであった。彼が死の前年発表した論文「農業と政治科学者」の中には次のような主張が見受けられる。(この論文は、67年5月オックスフォードの国際的理論誌 *International Journal of Agrarian Affairs* に掲載された。その内容は理論的でありかつ専門的である。しかし時析垣間見ることが出来る彼の思想は、以下の諸節にそして結論部分に現われている)。まず彼は、農業政策の決定におけるイデオロギーの押しつけに反対する。「何かの大義をイデオロギーとして人民に押しつけるかそれとも人民の合意を民主的に形づくるかというディレンマの中で、我々は明確に後者の立場を採るのである」<sup>19)</sup>。また農業政策の決定は、官僚主義者やテクノクラートに委ねられるべきものではない。「我々は、このような選択を官僚主義者が行なうことに反対する。何故なら彼らは、規則や政令あるいは法規の助けを借りながら、机上で国事を運営するからである。またテクノクラートにこの選択を委ねる様なことについても同じである。彼らは全ての解答を知っていると思っており、人間社会を管理するうえで、絶対的な権限を持っていると考えているのである」<sup>20)</sup>。こうしてビチャニッチは、農業政策の決定における政治的な科学・技術の専門家の役割を次のように限定する。彼らの役割は、決定とその執行の過程を合理的なものにすることである。具体的に彼らは、専門家として調査に携わることができる。次に、相談役として可能な選択肢をいくつか提示し、それぞれのおおよその結果について予測を示すことができる。第三に、所属する農業団体や組織の利益を、私見をはさまない限り、対外的に代表することができる。そして最後に彼らは、利益が対立した場合、調停者としてどのような目標や手段が双方にとって最善であるかを示すことができるのである<sup>21)</sup>。青年ビチャニッチにおける人民と知識人との関係、そして「法治国家」を越えた自治的な国家としての「農民の国家」の思想は、彼の死の直前まで守られたといえるのではないであろうか。

このような生涯をたどったビチャニッチについて、前述のヨヴァノヴィッチはその回想録のなかで、彼はどのような体制にも仕えることができた単なる「経済の専門家」であった、と述べた<sup>22)</sup>。しかし筆者は、これまで見てきたように、この評価には疑問を感じる。もし仮りに両者の思想を分かち、ヨヴァノヴィッチがこのように批判する要素があるとすれば、それはまずビチャニッチの柔軟な見識であるかもしれない。他方それは、長い歴史を見渡す広い視野と結びついており、確固とした「社会的意識」<sup>23)</sup>にもとづいていた。ヨヴァノヴィッチは理解しなかったが、ビチャニッチの内部ではこの二つの側面が結び合わされていたのである。

しかし、共産党優位のユーゴに帰国したとき、ビチャニッチの思想に「断層」は生じなかったかどうか、考えておくべきであろう。若き日のビチャニッチは、ヨヴァノヴィッチ

19) ここでは、72年 *Turning Points in Economic Development* に再録されたものを使用する。  
Ibid., p. 10.

20) Ibid., p. 20.

21) Cf. Ibid., p. 31.

22) Cf. D. Jovanović, *Ljudi, ljudi*, Beograd, 1973, str. 82-88.

23) ビチャニッチの著作 *Economic Policy in Socialist Yugoslavia*, Cambridge, 1973 (但し死後出版) のはしがきにマイケル・ケイザーは、ビチャニッチの経済学研究は、青年時代に得られた社会的意識 (social consciousness) によって支えられたと述べた。 Cf. Ibid., str. vii.

の回想によれば、1933年入獄するまでマルクス主義に関する豊富な知識を身につけていた。そして1940年訪ソした時のソ連の現状に関する講演において、彼がソ連の社会主義について客観的な評価を与えたこと\*からすれば、ビチャニッチが反共主義者であったと考えることは困難である。さらに彼が第二次大戦中亡命政府を離れパルチザンとの協力に向かった時、パルチザンにおける共産党のヘゲモニーも十分に承知していた。戦後について言えば、ユーゴ社会主義が「国家社会主義」であった時に「沈黙」していたのに対し、それが「自主管理社会主義」へ転換して以後彼は、この新しい方向を支持するようになった。以上からすればビチャニッチは、体制の変革そのものよりもどのような社会主義であるかにこだわったように思われる。社会主義の内容が国家権力の分権化や民族の平等と連帯に基づくものであるか否か、が彼にとって最大の関心事であり、戦後の国家主義化こそが「断層」であったと考えられる。

\*枢軸諸国の脅威のもとユーゴ政府は、スターリンのソヴェトに一縷の望みを託し、1940年の5月に通商条約さらに41年4月5日(ドイツ軍ユーゴ攻撃の前日にあたる)ソヴェトと不可侵条約を締結した。そしてビチャニッチは、この通商条約締結に際してユーゴ代表団の団長としてソヴェトを訪れ、モロトフらと会談している。帰国後の彼は、ソ連邦の印象について次のような講演を行った。まず、ソ連は無秩序と混乱の状態にあるという風評は誤りで、それは秩序と労働の国である、と述べる<sup>24)</sup>。次に彼は、ソ連の労働者は労働に応じて賃金を受け、食糧事情も決して悪くないことを明らかにした<sup>25)</sup>。そして最後に、旧皇帝がこの体制は容易に転覆させることができると考えたとしたら、それは全くの幻想であると結論づけている<sup>26)</sup>。

以上のようなルドルフ・ビチャニッチの生涯と思想の全体が、ユーゴスラヴィア史の特質を反映するもののように筆者には思われる。経済的水準や識字率など教育水準の低さにもかかわらず、この国では農民をはじめとする人民大衆が自分たちの運命を決しなければならぬ。外国の支配が長かったため、土着の指導的支配層の勢力はぜい弱であった。またこの外国支配が残した各地域の歴史的伝統の多様さゆえに、この民衆運動は民族的多元性の保障を要求する。このようなユーゴ民衆運動の「自己認識」を、すべてパルチザン運動の功績と考えるべきではないであろう。ビチャニッチ自身は武器を手にしてこの運動に加わった訳ではない。しかし孤独な苦悩のちユーゴ史の底流に従った彼の姿こそがこの流れの力強さを物語るのであり、そして戦後のビチャニッチは、こうした底流が時として見過ごされることに絶えず警告を発した。1963年の憲法が未だ草案の段階にあった時、ビチャニッチは、クロアチア共和国憲法草案の条文にクロアチア民族の独自性について一言も触れられていない点を批判した<sup>27)</sup>。他方、こうした知識人の活動について、この国の歴史研究がこれまで光をあてた形跡はない。「自己認識」をさらに深めるため虚心に過去を振りかえることが、この国の歴史研究に求められると筆者は考える。

24) Cf. R. Bičanić, "Tekst predavanja o utisku Sovjetskog Saveza", 1 VI 1940, Ostavština R. B.

25) 同 上

26) 同 上

27) Cf. R. Bičanić, "Memorandum o Prednactu Ustava Socijalističke Republike Hrvatske, 6 siječnja 1963, Ostavština R. B.

ビチャニッチの思想の展開は、東欧の人民主義的運動における「農民主義」から「新人民主義」への移行の具体例を示してくれる。しかし具体例が、逆にシェーマの意味を問い返すこともあるであろう。たしかにヨネスクの段階区分どおり、第二次大戦をへてビチャニッチは農民のヘゲモニーの旗を下ろし、農民と労働者の同盟を人民と呼ぶようになった。しかしそれ以外については、ビチャニッチの思想にさほど大きな変化があったとは思われない。彼にとって労働者と農民の区別そのものが、ヨネスクほどに重大な意味を持つてはいなかった。現にユーゴ労働者の大半が、戦後も農業とのつながりを断ち切らなかった。そしてより遠大な視野からすれば、彼にとっていずれ農業と工業は統一されるのであった。つぎに、民族解放の思想としての「農民主義」は、戦後のビチャニッチにも堅持された。この国の社会主義が、まがりなりにも、民族の平等を国是としたことがそれをたすけた。彼の例によれば、このように「新人民主義」も「農民主義」の大きな痕跡をとどめずにはおかなかった。そして最後に、人民と知識人の関係に対するビチャニッチの思想は「農民主義」はもちろんヨネスクのいう「人民主義」にも属さなかった。旧友ヨヴァノヴィッチとも異なって、ビチャニッチは農民に対する啓発啓蒙を認めなかったのである。各思想家の個性や時代の特徴を把握すること、同時に東欧人民主義思想に対するヨーロッパの思想の複雑な影響関係を検討することが今後必要となるであろう。

The Meaning of "Peasant State" in the Social Thought  
of Rudolf Bićanić —A Study of Yugoslav Populism—

Isao KOSHIMURA

What are the characteristics of the populist movement in Eastern Europe? This is the basic question that concerns the author of the present paper. Answering this question, Ghița Ionescu gave a challenging explanation in using two key terms; "populism" and "peasantism". According to him, the populist movement in Eastern Europe made its first appearance under the influence of Russian "populism" at the end of the nineteenth century. But gradually this movement changed its nature and finally became a movement not for the whole people but for the peasants. We can see this apparent change especially after the First World War when the peasant parties came into power. This movement of "peasantism" was powerful partly because it was motivated by nationalism. But the era of dictatorship and the world economic crisis that followed turned the tide. One of Ionescu's most interesting viewpoints is that "populism" returned as "neo-populism" owing to its wider appeal to the power of East European people than in the case of "peasantism".

The author regards the Yugoslav populist movement as one of the most powerful political trends in Eastern Europe not only in the past but even now. And Rudolf

Bićanić is a very important witness of this Yugoslav populist movement. He himself participated in the populist movement and stuck to his "populism" through out his life in Socialist Yugoslavia.

First, the present paper analyses the Croatian populist movement, which Bićanić assisted as a spokesman of economic policy after the Crisis. Then his idea of "seljačka država (Peasant State)" is examined and investigated. And lastly the author discusses the role and meaning of the populist movement as it was witnessed by Rudolf Bićanić in the course of the contemporary history of Yugoslavia.

### 1. "Narod" and Inteligentsia

Rudolf Bićanić joined and organized the cooperative movement in 1936. This cooperative, called "Gospodarska Sloga (Economic Union)", was one of the sub-organizations of the Croatian Peasant Party. Unlike the veteran leaders of the Party, Bićanić at once started exploring the real state of the peasants' life, and realized the necessity of depending on their spontaneous energy. In fact the Croatian peasant had already begun to demand regional economic rights and other political concessions from the centralist Serbian government. Therefore Bićanić's attitude to the peasant could not be likened to or identified with that of the Russian populists. He was rather under the influence of French ideas, especially those of Gorge Sorel in which he apparently took a great interest while he was staying in France.

One characteristic of this "Economic Union" movement was its democratic organization; it was organized not only "for" the peasant but also "by" the peasant. This strengthened the role of the peasant, but it did not necessarily mean the exclusion of the worker. In the interpretation of Ionescu, this period was regarded as the turning point of the movement from the "peasantism" to the "neo-populism". In the second half of 1930's, while the workers movement was growing in Yugoslavia, the peasants did not remain satisfied with the leadership of the peasant parties any more.

### 2. The Idea of "Peasant State" before and during the Second World War

In 1940 Bićanić gave his outline of a peasant state. First of all, he insisted that a peasant state must be the "complex state". As for the "complex state", he had already declared his anti-centralism at the parliamentary election of 1938. In this lecture he emphasized that the small nations that formed Yugoslavia would not be able to survive without mutual cooperation. It is of special interest that one prominent opinion leader of this small Croatian nation publicly refuted the Nazi and fascist state system. What Bićanić sought to point out in this criticism was that the post-crisis state should be governed with the concrete will of the people, not by any exceptional race or "indifferent" government.

Then what does “the people” mean? Can it be identified with the peasant? By that time he had widened the concept of the peasant. According to him, a peasant is the representative holder of the rural way of life and culture. Everyone could be regarded as a peasant as long as he keeps connection with this rural culture. Therefore a worker or even a teacher could be called a peasant when he connects himself with rural culture. By the word “people”, Bićanić means all inhabitants who support the rural culture. This widened concept of the peasant, together with his flexible attitude to industrialization, led Bićanić to change his political stand during the world war II.

Rudolf Bićanić held the idea of a federal Yugoslavia through the war. Getting in touch with wide European movements in London, he came to regard this federalism as an effective mean of the antifascist movement. Once in London he had recognized that each of Yugoslav nation has its own history. So he insisted on the principle of federalism based on respect for the history of each nation. But leaders of the Croatian Peasant Party did not always demonstrate this sort of federalism nor the resistance against the nazi occupation forces who tried to annihilate Yugoslav nations. Only Tito's partisans seemed to Bićanić to be able to organize the people's power and potentiality, and to reunite Yugoslavia on a federal democratic basis. By 1943 he had begun to support the communist resistant movement.

The present author considers this change in Bićanić's political views to be one concrete evidence to show his development from “peasantism” to “neo-populism”.

### 3. Bićanić's Idea of “Peasant State” and Its Historical Meaning

Bićanić insisted that even the liberation of serfs in 1848 is the end-product of serfs' power for revolt in Croatia. In his view peasants' revolutionary movement forms the undercurrent of Yugoslav history. Against this current, the communist leaders fell into the trap of centralism in the post-war tumult. Bićanić's interpretation of the liberation of serfs in 1848 was in itself a protest to this centralization of power.

It was not until the new Yugoslav way to socialism was introduced that Bićanić could defend the socialist regime. Because this time new Yugoslav socialism recognized the democracy “by” the people. That is why he denounced as reactionary those who were against decentralization, and he also criticized the stubborn reluctance of the Croatian communists who could not stand up for Croatian historical tradition. Thus it seems to the author that the spirit of “Peasant State” still survives in the post-war Yugoslav history.

Bićanić himself thought that industrialization would be accompanied with an increase in agricultural production. In other words, urbanisation of life would not conflict with rural life if human technology mediates between them. In fact,

according to Bićanić, Yugoslav workers hardly cut themselves off the rural roots of their life.

In short, Bićanić's thought and whole life show the fact that "neo-populism" embraces elements of "peasantism" closely connected with rural life, although Ionescu does not see the point. Bićanić's attitude towards the peasants would not be explained adequately by Ionescu's terms. The above would provide critical points of view in further analysis of the East European populist movement.